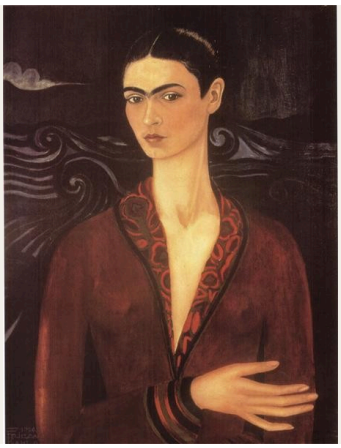
1907–1954

フリーダ・カーロの自画像には何が入るのか

フリーダ・カーロの二十作品。人物像を二重にし、切り開き、あるいはその周りを埋め尽くす自画像に、家族の絵、他の人々の肖像、静物画を交えて。

AI翻訳を使用



フリーダ・カーロの自画像は美術館の外でも広く知られていますが、見慣れた彼女の写真や劇的な人生の出来事が、絵そのものを見る妨げになることもあります。それでも、絵の中には見るべきものが数多くあります。彼女が選んだ植物や動物、身に着けた服、思い起こした人々、そして不思議なほど率直な顔の描き方です。

この選集の中心は自画像ですが、それだけが並ぶわけではありません。バスの乗客、編み物をする年配の女性、カメラを伴う父の姿、切ったスイカの静物画もあります。これらとともに見ると、自画像は同じ像の繰り返しというより、それぞれに大きく異なる絵の連なりに見えてきます。居場所についてほとんど語らない背景を背にした顔、二重になった身体、切り開かれた身体、猿や葉にますます取り囲まれる顔。ディエゴ・リベラは二度登場し、そのたびに彼女との関係は大きく異なります。いくつかの作品には文字が記され、また別の作品はガラスや鏡によって絵の表面の先へと広がっています。優しさのある絵もあれば、直視しがたい絵もあり、容易には読み解けない絵もあります。伝記上の事実には、描かれたものを理解する助けとなる場合に触れます。

編集上の判断で選んだ二十作品であり、作品総目録ではありません。妊娠の喪失、負傷、血を直接描いた作品がいくつか含まれます。複製画像には、記録されたクレジットと権利表示を保持しています。画像が自由に流通していても、再利用の許可があるとは限りません。

アートラインでこのセレクションをご覧ください

これら二十点の作品を、同時代の書籍や出来事と並べてご覧ください。生涯をたどる視点には、フリーダ・カーロ、ディエゴ・リベラ、ジョージア・オキーフ、タルシラ・ド・アマラル、レメディオス・バロが含まれます。こうした比較は、直接的な影響関係を主張するものではなく、歴史的な文脈を提示するものです。

文脈の中の芸術作品　誰がいつ生きたのか?

artlines.org/guides/frida-kahlo

作品一覧・20

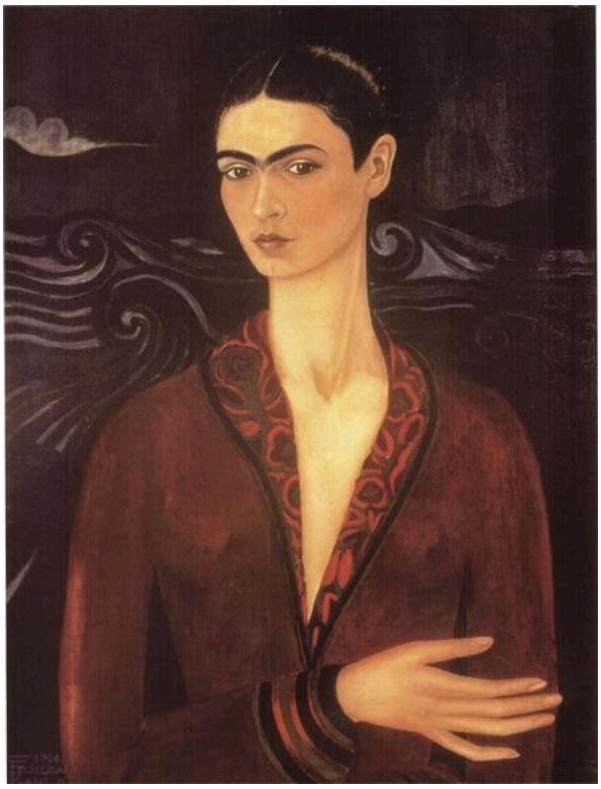
1. Self-Portrait in a Velvet Dress
   Frida Kahlo · 1926
2. The Bus
   Frida Kahlo · 1929
3. Frieda and Diego Rivera
   Frida Kahlo · 1931
4. Henry Ford Hospital (The Flying Bed)
   Frida Kahlo · 1932
5. Self-Portrait on the Border between Mexico and the United States
   Frida Kahlo · 1932
6. My Grandparents, My Parents, and I
   Frida Kahlo · 1936
7. Fulang-Chang and I
   Frida Kahlo · 1937年；1939年より後に組み立て
8. Self-Portrait Dedicated to Leon Trotsky
   Frida Kahlo · 1937
9. The Frame
   Frida Kahlo · 1938
10. The Two Fridas
    Frida Kahlo · 1939
11. Self-Portrait with Cropped Hair
    Frida Kahlo · 1940
12. Self-Portrait with Thorn Necklace and Hummingbird
    Frida Kahlo · 1940
13. Self-Portrait with Monkey and Parrot
    Frida Kahlo · 1942
14. Self-Portrait with Monkeys
    Frida Kahlo · 1943
15. Portrait of Doña Rosita Morillo
    Frida Kahlo · 1944
16. The Broken Column
    Frida Kahlo · 1944
17. The Wounded Deer
    Frida Kahlo · 1946
18. Diego and I
    Frida Kahlo · 1949
19. Portrait of My Father
    Frida Kahlo · 1951
20. Viva la Vida, Watermelons
    Frida Kahlo · 1954

01 / 20

Self-Portrait in a Velvet Dress

Frida Kahlo

1926



Frida Kahlo; WikiArt · Public domain (WikiArt label)

カーロがまだ若い画家だったころに描いた初期の作品で、改まった趣があります。長い首、黒い髪、ドレスの深紅のビロードは、何気ない似姿ではなく、意識的に整えられた像を作り、彼女はまっすぐこちらを見ています。背景は彼女がどこにいるのかをほとんど語りません。その控えめな描写は、この選集にある後年の自画像のいくつかが、葉や動物で隙間なく囲まれていることと比べると際立ちます。細心に整えられたポーズからは、自分をどう見せたいのかを探る画家の姿がうかがえます。

作品情報の出典 · 作品を開く

02 / 20

The Bus

Frida Kahlo

1929



Frida Kahlo; WikiArt · Public domain (WikiArt label)

ここでカーロは、自分の顔から他の人々へと目を向けています。窓越しに街が見えるなか、乗客たちが一つの長椅子に並んで座っています。それぞれの違いを示すのは、身に着けたものや携えたものです。作業着、帽子、籠、誰かの腕に抱かれた子ども。長椅子は、それとは逆の働きをします。人々を隣り合わせに座らせることで、彼らの社会的な隔たりが、ごく近い距離のなかで測られるのです。

作品情報の出典 · 作品を開く

03 / 20

Frieda and Diego Rivera

Frida Kahlo

1931 · 油彩、キャンバス · San Francisco Museum of Modern Art (SFMOMA), San Francisco, CA, US



WikiArt; Frida Kahlo · Public domain

道具を持っているのが誰かという点に、皮肉があります。パレットと筆を持つのはリベラですが、この絵を描いたのはカーロです。しかも、彼の姿は彼女よりはるかに大きく描かれています。大きな暗い色のスーツ姿の隣に、鮮やかな服を着た小さな彼女が立ち、つないだ手が二人を結んでいます。文字の記された帯が、この二人の肖像を、誰かに宛てた文書へと変えています。題名では、彼女の名はeを入れたFriedaという綴りになっています。

作品情報の出典 · 作品を開く

04 / 20

Henry Ford Hospital (The Flying Bed)

Frida Kahlo

1932



Frida Kahlo; WikiArt · Public domain (WikiArt label)

デトロイトで妊娠を失った後、カーロは工業地帯の地平線を背に、屋外に置かれた病院のベッドに横たわる自分を描きました。別題の《空飛ぶベッド》は、その奇妙さをよく捉えています。病院のベッドなのに周囲に病院はなく、患者を守る壁もありません。彼女の身体からは赤い紐が伸び、互いに離れた形につながっています。その一部は解剖学的な形です。紐がそれらを結ぶのは、同じ部屋に置ける物としてではなく、体験として、あるいは起きたことを表すしるしとしてなのかもしれません。

作品情報の出典 · 作品を開く

05 / 20

Self-Portrait on the Border between Mexico and the United States

Frida Kahlo

1932 · 油彩、金属



WikiArt; Frida Kahlo · Public domain

画面は二つに分かれています。一方を歴史的な造形物と植物が、もう一方を工場と機械が埋め、地下では根とケーブルが競い合う網のように広がっています。カーロは、その境界線上の台座に立っています。二つの風景が混じり合うことはないため、メキシコとアメリカをめぐる主張は図解に近い模式的なものにとどまり、彼女の姿だけが両者の比較をつなぎとめています。台座は何かを展示する場所ですが、そこに立つ彼女は、どちらにも完全には属せず、取り残されているようにも見えます。

作品情報の出典 · 作品を開く

06 / 20

My Grandparents, My Parents, and I

Frida Kahlo

1936 · 亜鉛板に油彩・テンペラ · Museum of Modern Art



Frida Kahlo; WikiArt · Public domain (WikiArt label)

家系図を文字どおり絵にした、亜鉛板に油彩とテンペラで描かれた作品です。赤いリボンが血筋をたどり、一つの場面に同じ縮尺で居合わせることなど到底できない世代を結んでいます。その先にいるのは中庭の子どもで、おそらく題名の「私」に当たります。家の上方には、結婚式の衣装を着たカーロの両親が現れ、家族の歴史の別の時点が同じ絵に織り込まれています。ここでは、顔立ちが似ていることより配置が重要です。誰がどこに置かれ、何が何につながっているかが、情報を伝えています。

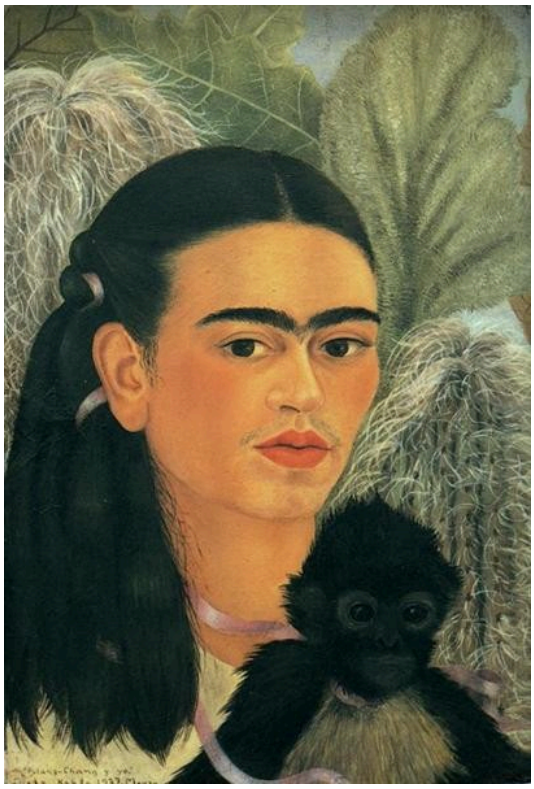
作品情報の出典 · 作品を開く · 所蔵品登録: 102.1976

07 / 20

Fulang-Chang and I

Frida Kahlo

1937年；1939年より後に組み立て · 油彩、メソナイト · Museum of Modern Art



WikiArt; Frida Kahlo · Public domain

ここに掲載したものを含め、よく知られる複製画像に写っているのは、絵が描かれた板だけです。葉とリボンに囲まれ、カーロのすぐ隣に猿が座っています。しかし、MoMAが所蔵する作品はそれだけではありません。1939年より後のある時点で、絵に鏡が組み合わされ、描かれた二者の隣に鑑賞者自身の姿が映るようになりました。女性と猿の二者の肖像は、その場で見る人が加わることで完成する、三者の出会いへと変わります。

作品情報の出典 · 作品を開く

08 / 20

Self-Portrait Dedicated to Leon Trotsky

Frida Kahlo

1937 · 油彩、メソナイト · National Museum of Women in the Arts



Frida Kahlo; reproduction via WikiArt · Public domain (WikiArt source label)

カーロは、開かれたカーテンの間に全身を見せて立ち、花と文字の記された手紙を持っています。小さな舞台に立っているかのようです。献辞には肖像の贈り先としてレオン・トロツキーの名があり、絵全体も贈り物として整えられています。花と手紙は差し出すものであり、彼女自身は公の場にふさわしい距離を置き、周囲に立つための空間を残して示されています。この選集で後に登場する、動物を伴う接写のような自画像には、このような改まった登場のための余地はありません。

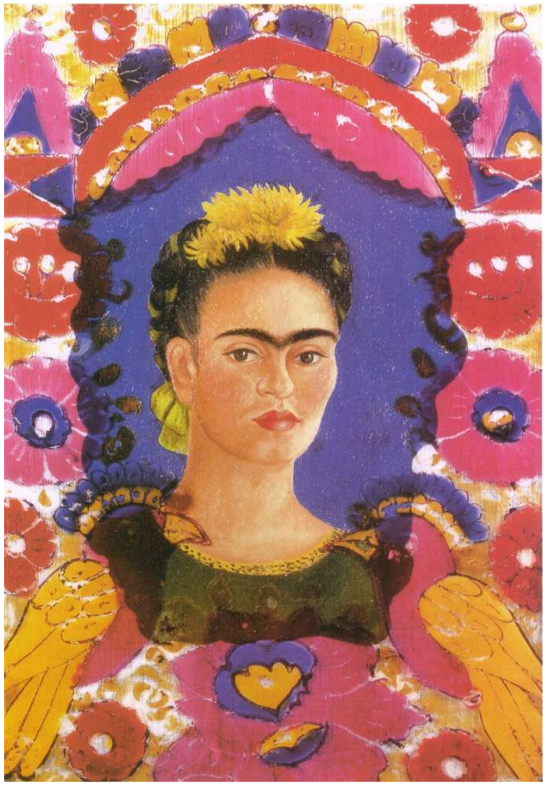
作品情報の出典 · 作品を開く

09 / 20

The Frame

Frida Kahlo

1938 · アルミニウムに油彩、彩色ガラスの枠付き · Centre Pompidou



Frida Kahlo; reproduction via WikiArt · Public domain (WikiArt source label)

題名が示すとおり、ここでは額縁も作品の一部です。アルミニウムに描いた小さな自画像に、別に作られた彩色ガラスの枠が組み合わされています。その花や鳥の装飾が、メキシコの装飾工芸を絵の制作に取り込んでいます。両者は同じ表面にあるわけではありません。重なった部分では、カーロの顔はガラス越しに見えるため、装飾は肖像の周囲だけでなく、その手前にも位置します。枠を取り去れば、肖像の見え方は大きく失われるでしょう。

作品情報の出典 · 作品を開く · 所蔵品登録: JP 929 P (1)

10 / 20

The Two Fridas

Frida Kahlo

1939 · キャンバスに油彩 · Museo de Arte Moderno



Frida Kahlo; WikiArt · Public domain (WikiArt label)

二人のフリーダが座り、手を握り合っています。表情はよく似ているため、二人を見分ける手がかりは服装です。二人をつなぐのは手だけではありません。どちらも心臓が見え、一方から他方へと血管が伸びています。淡い色のスカートには血が染み込み、二人をつなぐその線が傷つきやすいものに見えます。握り合った手のほうが、より確かなつながりとなっています。

作品情報の出典 · 作品を開く

11 / 20

Self-Portrait with Cropped Hair

Frida Kahlo

1940 · キャンバスに油彩 · Museum of Modern Art



Frida Kahlo; WikiArt · Public domain (WikiArt label)

髪はすでに切り終えられています。カーロはゆったりしたスーツで座り、手にはまだ鋏を持ち、周囲の床には切り落とした髪が散らばっています。そのため、この絵は変わった彼女の姿と、その変化によって取り除かれたものの両方を示しています。上部には歌詞の一節が横に記され、絵の中にもう一つの声を加えています。その言葉は愛と女性らしい装いに関わり、この場面をより鋭く感じさせますが、髪を切った行為の意味を一つに定めることはありません。

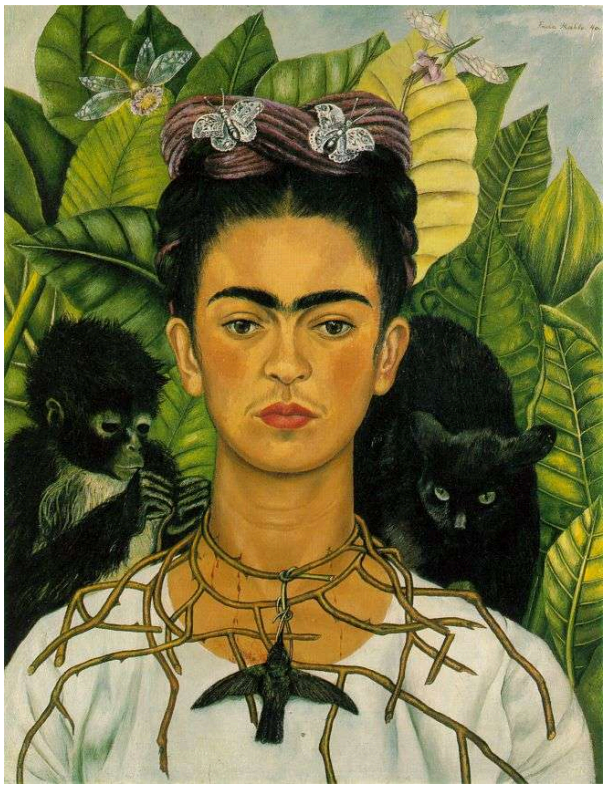
作品情報の出典 · 作品を開く · 所蔵品登録: 3.1943

12 / 20

Self-Portrait with Thorn Necklace and Hummingbird

Frida Kahlo

1940 · 油彩、キャンバス · Harry Ransom Center



Frida Kahlo; reproduction via WikiArt · Public domain (WikiArt source label)

ここでは、すべてが顔に迫っています。茨の首飾りがカーロの首に食い込み、そこにはハチドリも見えます。両肩のそばには猫と猿がおり、背後の密生した葉がその先の眺めを遮っています。動物や植物は象徴としての解釈を誘い、見る人はそれを解く鍵を求めるかもしれません。しかし、この絵が力を発揮するのに、その鍵は必要ありません。首に触れる茨も、これほど間近にいる生き物たちも、その意味を解き明かすより先に、圧迫感として伝わってきます。

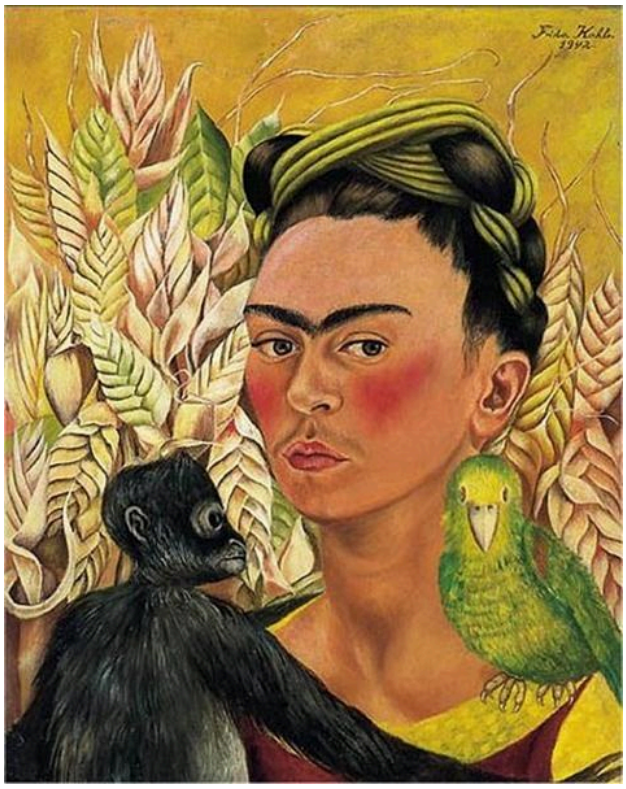
作品情報の出典 · 作品を開く

13 / 20

Self-Portrait with Monkey and Parrot

Frida Kahlo

1942 · メソナイトに油彩 · Museo de Arte Latinoamericano de Buenos Aires (Malba)



Frida Kahlo; Museo de Arte Latinoamericano de Buenos Aires (Malba); Colección Malba. Donación Eduardo F. Costantini, 2003; WikiArt · Public domain

大まかな配置は左右対称に見えます。顔の片側には猿、もう片側には緑のオウムがいます。その釣り合いを揺るがすのが色です。オウムの緑は、その下にある衣服の色に近く、鳥と彼女を結びつける一方、暗い色の猿はそこから離れたままです。わずかに横へ向けた顔が、その均衡をさらに崩しています。

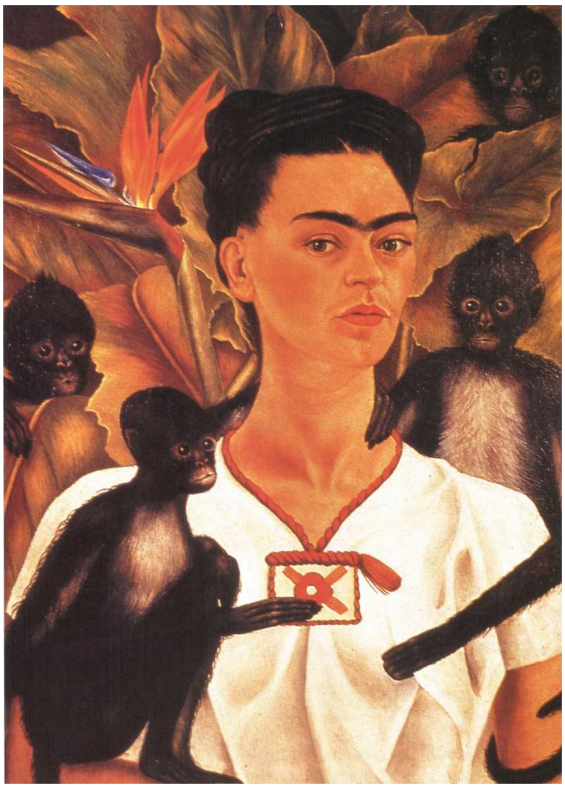
作品情報の出典 · 作品を開く · 所蔵品登録: 2003.34

14 / 20

Self-Portrait with Monkeys

Frida Kahlo

1943 · 油彩、キャンバス



Frida Kahlo; reproduction via WikiArt · Public domain (WikiArt source label)

この選集のそれ以前の自画像では、彼女の連れは少数の動物でしたが、ここでは群れになっています。密生した葉を背に、何匹もの猿が白いブラウスの周囲に押し寄せ、手足が重なり合い、画面は雑然と崩れてしまいそうです。それでもまとまりを保っているのは、静止した人物像の縁に沿って動きが分散していることと、顔の明瞭な輪郭が、目を休める場所を与えているためです。

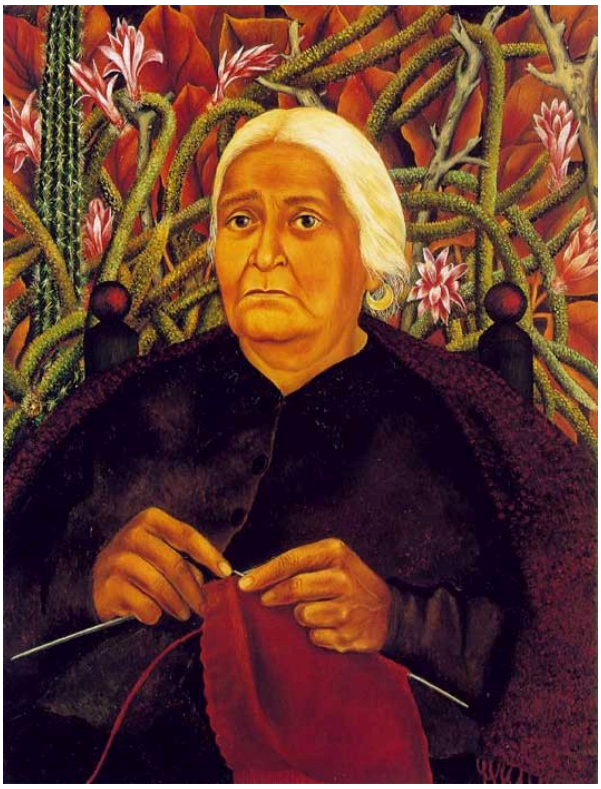
作品情報の出典 · 作品を開く

15 / 20

Portrait of Doña Rosita Morillo

Frida Kahlo

1944 · 油彩、メソナイト



Frida Kahlo; reproduction via WikiArt · Public domain (WikiArt source label)

年配の女性、ドーニャ・ロシータ・モリジョが編み物をしています。淡い色の毛糸と編み針が暗い色のドレスを背に際立ち、まず働く手へと目が向かいます。植物が彼女を囲む様子は、自画像のカーロを囲むものとよく似ていますが、その顔は明らかに別の人のものです。

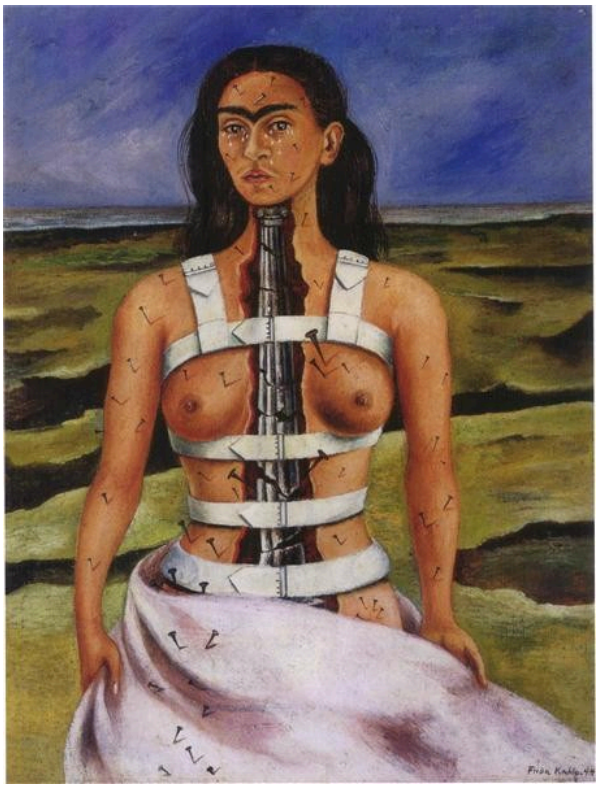
作品情報の出典 · 作品を開く

16 / 20

The Broken Column

Frida Kahlo

1944



Frida Kahlo; WikiArt · Public domain (WikiArt label)

胴体の内部に隠れた構造の代わりに、折れた建築の柱が立っています。支えそのものが壊れているのです。帯が身体を縛り、釘と涙が表面に痛みを刻んでいます。亀裂は背後の風景にも続き、損傷が身体の境界で止まらないかのようです。

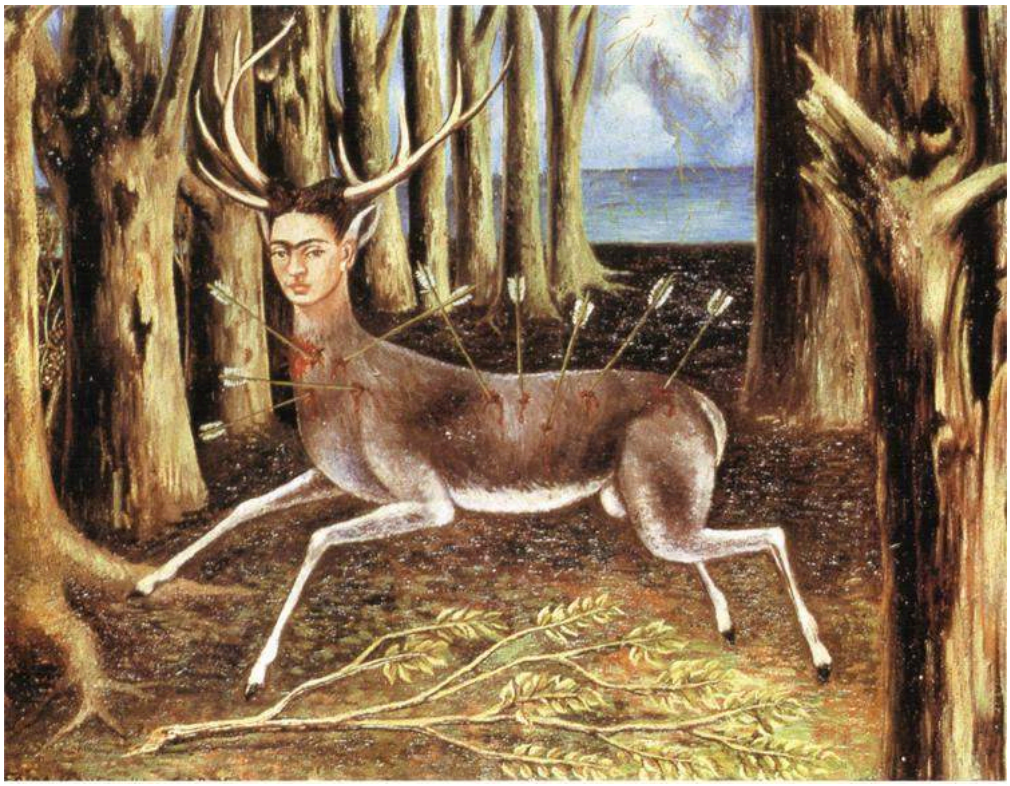
作品情報の出典 · 作品を開く

17 / 20

The Wounded Deer

Frida Kahlo

1946



Frida Kahlo; WikiArt · Public domain (WikiArt label)

カーロの顔を持つ鹿。その身体を貫くのは、《折れた柱》の釘に代わって矢です。動物の身体は、別の種類の傷つきやすさをもたらします。鹿は走ることができますが、同時に標的でもあります。木の幹が周りを取り囲み、森を細い隙間に分けています。その向こうには開けた場所がありますが、そこへ至る明確な道はありません。

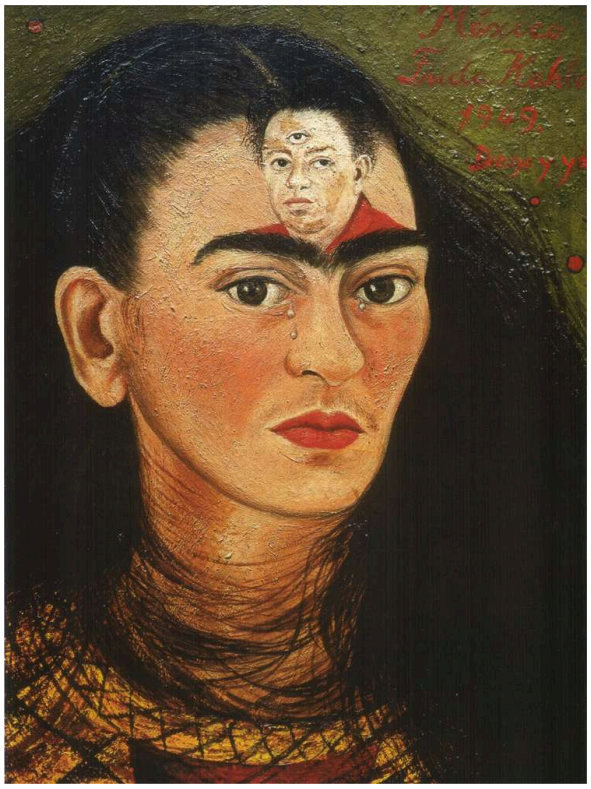
作品情報の出典 · 作品を開く

18 / 20

Diego and I

Frida Kahlo

1949 · 油彩、キャンバス、メソナイト



Frida Kahlo; reproduction via WikiArt · Public domain (WikiArt source label)

カーロの額には、第三の目が置かれることもある位置に、ディエゴ・リベラの小さな肖像があります。そして、その中の彼の顔にも、もう一つの目があります。その下の彼女の顔には涙が筋を引き、髪はほどけています。この選集で先に登場した二人の肖像では、二人は隣り合って立ち、つないだ手で結ばれていました。ここには空間も背景となる場所もなく、ただ彼女の顔があるだけで、彼は彼女自身を描いた像の内側にいます。

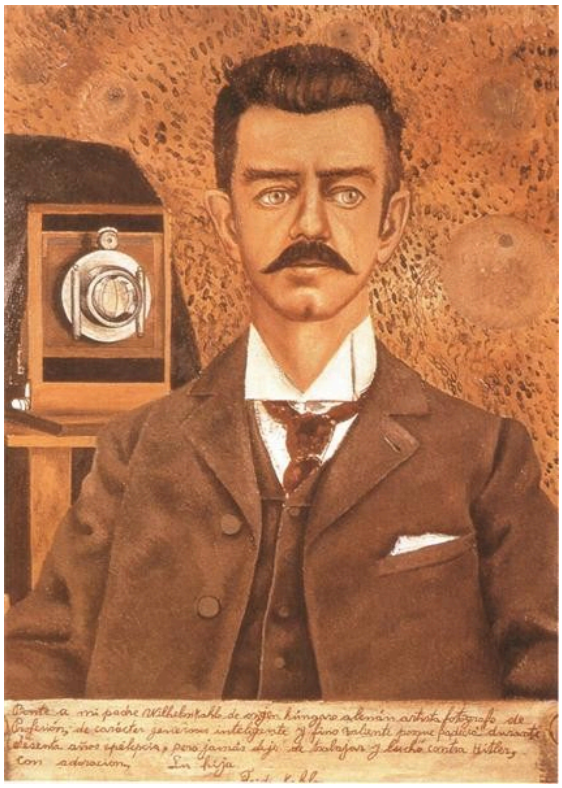
作品情報の出典 · 作品を開く

19 / 20

Portrait of My Father

Frida Kahlo

1951 · 油彩、メソナイト



WikiArt; Frida Kahlo · Public domain

ギジェルモ・カーロは、その職業を示すカメラとともに、きちんとした正装で、落ち着いた姿に描かれています。肖像の下には娘の言葉による文章が記され、似姿だけでは伝えられない彼の人となりを語っています。彼はこの選集にすでに一度登場しています。家系図の絵で、家の上方に結婚式の衣装で描かれ、血筋をたどるリボンの一つの結び目となっていました。

作品情報の出典 · 作品を開く

20 / 20

Viva la Vida, Watermelons

Frida Kahlo

1954 · 油彩、メソナイト



WikiArt; Frida Kahlo · Public domain

今度は顔がまったくなく、不揃いに切ったスイカだけがあり、果肉は鮮烈な赤です。一切れの果肉の中に、「生よ、万歳」を意味する「VIVA LA VIDA」という文字が記されています。その文字は、標語として果物の上に浮かぶのではなく、皮や種、切り分けた実の間にとどまっています。そのため、言葉は説明文のように上から添えられたものではなく、静物画そのものに属しています。

作品情報の出典 · 作品を開く

言葉、ガラス、そして鏡

これらの絵が描かれた似姿の外へと広がる手段として、最も多いのは文字です。その言葉が単なる説明にとどまることはほとんどありません。それぞれが異なる役割を担い、異なる場所に置かれています。リベラとの二人の肖像にある帯も、トロツキーへの献辞も、誰かに宛てられています。《髪を切った自画像》の上部を横切る歌詞は歌の声を借り、ギジェルモ・カーロの下にある文章は証言として読めます。そして「VIVA LA VIDA」は、果物そのものの中に収まった感嘆の言葉です。一方、《額縁》と《フラン・チャンと私》は素材を通じて外へと広がります。前者は鑑賞者とカーロの顔の間に彩色ガラスを置き、後者は鑑賞者が映る鏡を加えています。この選集の絵は、しばしば似姿であると同時に、手紙、文書、あるいは複数の部分を組み合わせた物でもあります。そして一度ならず、その外にいる誰かへと向けられています。それは名を記された受取人であったり、鏡に映り込む見知らぬ人であったりします。

関連書籍

The Diary of Frida Kahlo: An Intimate Self-Portrait

Frida Kahlo; introduction by Carlos Fuentes; commentary by Sarah M. Lowe · 出版社ページ：購入または図書館

絵と文章のページを並べた日記そのものに、カルロス・フエンテスの序文とサラ・M・ロウの解説を添えた本です。そのページが書かれた時期は、この選集の初期の絵画とは異なり、文字と図像が同じ表面を共有する後年の作品と併せて読むと、とりわけ役立ちます。

Frida Kahlo: Self-Portrait with Cropped Hair

Jodi Roberts · The Museum of Modern Art, 2019 · 出版社提供の無料サンプルPDF

MoMAの「One on One」シリーズのために、ジョディ・ロバーツが《髪を切った自画像》という一枚の絵について書いた一冊です。スーツ、散らばった髪、キャンバス上部を横切るように描かれた歌詞を詳しく見ていきます。出版社の無料サンプルで読めるのは、本の一部だけです。

画家に関する資料 · 博物館の調査・研究

確認済み情報源: 2026-10-12

AI翻訳を使用

Artline · フリーダ・カーロの自画像には何が入るのか